

女子教育談



## 高等女子教育の必要を論じ併せて其の反對説に答ふ

貴顯紳士諸君、本日不肖の私が諸君の御面前に立つて卑見を開陳し、且つ私の熱望する所を訴ふることを得まするは、實に光榮の至りに存じます。

今や、多事多望の日本帝國の代表者たる諸君の前途には、政事問題や社會問題や其他種々の時事問題や國家百年の計畫など實に澤山の問題が山の如くに横つて居り升。諸君は凡て此等の問題や經營に付て討議研究を凝され維れ日も足らずと云ふ有様で御座りますが、此等の問題の中には確かに教育問題が這入つて居るふと存じ升。此の教育問題は貨幣問題のごとく築港問題のごとく國防問題のごとく外交問題のごとく殖産商業等に關する問題のごとくに、焦眉の急務と云ふべき問題でなく、ズット後廻はしにしてもよい問題ではありませふ乎。私は斷じてそふでないと考えます。

如何となれば公平無私の心を以て全般の問題を攻究するに當りまして段々煎じ詰めますると、結局は必ず教育問題に歸着せざるを得ぬのであります。善きも惡きも其原を繹ねますと何事も多くは教育の善惡に因ります。支那に勝つた、支那が負けたと申しましても其功過は必ず教育に歸します、社會が腐敗する、風俗が紊亂すると云つても其の本は心にあります、家庭にあります、遺傳にあります。其の心、其の遺傳、其の家庭の善惡は多くは教育より來るもので決して自然のみではありません。我兵の體力が弱ひ、體軀かたがたが小さい丈が低い、之れは如何にすべきか、教育に依るより外仕方は御座りませぬ。國が貧乏だ、何如にして之を救ふべきか、大に殖産工業を起し、大に商業を營むべきでありますが、之を起し之を營むには智識が必要です。然るに智識を與ふるものも亦矢張教育です。勿論之れは私の喋々たぐひするまでもありません。この重要な教育問題は早晚必ず社會に起るべきであります。否既に起りつゝあるの

あります。既に其の徴候が見えて居ります。之れを要しまするに教育は實に國家の盛衰消長する所以の基礎であります。一體國家の滅亡する所以のものに二つの原因があります。一つは外部より來るもので他の一つは内部より發するもので御座ります。外部より來るものは兵力でありますから、亦兵力を以て之を防ぐ事が出來ますが、内部より發するものは其發するや隱微の間に徐々として發します。恰かも深夜熟睡中洪水に襲るゝ様でありまして最も油斷のならぬ大敵であります。強敵であります。而して此強大な敵を防ぐものは教育の力で御座ります。教育はたゞ之れを既發の後に防ぐのみではありません、まだ敵の起らぬ前より之れを防ぐものであります、只に之を豫防するのみでもありません、國家をして益健全強固の生長を遂げさせるもので御座ります。故に古今東西の區別なく教育の振ふ國は榮え教育の衰ふる國は衰微して居ります。ペルシヤが往古西亞の天に雄飛したるのは乘馬に巧に弓術に長け虚言を吐かぬといふ教育主義が雄飛させたのである。 그리스がマラソンの役で彼のペルシヤの大敵を歐洲の天地から打ち拂ふたのは希臘の尙武主義教育が打ち拂はせたのである。殊に女子教育が有力のものであります、母親が其子の出陣の砌に楯を與へて「敵を殺すか然らざれば自ら之れに乘りて歸れ」と命ぜしが如きは其一例で御座ります。即ち此尙武的精神を先づ第一に婦人に吹き込んだ。羅馬に於ても尙武教育の旺盛を極めた時代はローマ帝國膨脹の時代でありました。我國でもそうであります。徳川幕府の際盛を極めたるも代々の將軍が教育を尊重奨励したからで御座ります。斯様に國家の興るのは教育の振ふによりますが其亡ぶるのも亦教育によります。徳川幕府の亡びたるも、ギリシヤ、ローマの亡びたるも、一ツ教育の道に過まつたからで御座り升。故に今日に於きましても競て教育を盛にするといふは歐洲諸國の實況で御座ります。佛國の敗軍獨乙の勝利は教育の勝敗だといふ程になつてをりまして、其後佛國は大に教育、殊に女子教育にも着眼する様に立ち至りました。

然るに我國の教育の現状は如何でありますか。振てをりますか、完備してをりますか、普及してありますか、今日の

有様で安心して居つて宜敷う御座りますか。一體國民を教育してをりますものが四つあります。天然と社會と家庭と學校でありますが、天然は國民を教育するに有力なる感化力がありますが、是は人爲を以て自由に變更する事が出来ませんから論外と致しまして、先づ學校教育の現状より考へますると如何で御座りますか。人口凡そ四千五百萬の我國と、人口凡六千萬の北米合衆國との状態を比較して見ますに、日本には大學が二校と高等學校が六校で而かも此二つの大學と六つの高等學校は無論女子に入學を許してをりません。本邦で女子に高等の教育を授けて居るのは女子高等師範學校のみであります。其内専門教育を施すものは只一校のみです。而して米國に於きましては大學と稱するものは三百五十七校で其中女子に入學を許すものは實に二百三十七校で、又東部には純粹の女子大學が九校もあります。又大學女生の總數は、四萬二千六百六十三人で、男生六十に女生四十の割であります、我國では大學に女學生といふものは勿論ありませんが専門學校にをきましては男生九十九人に女生一人であります。中學校にては我國では男生九十人に女生十人ありますが、米國では公私平均で男生四十四、五に、女生五十四、五であります。本邦の師範學校では男生九十一人に女生九人ありますが、米國では男子十七人に女生八十三人あります。普及すべき普通教育に至つても學齡兒童就學兒童との比例は六十と四十であります、故百につき六十はいろいろの字も識らぬ國民を造てをるありさまです。而して小學正教員の不足は現今二萬人といふ多數であります。之れはほんの大略であります。之れでも本邦教育の上進と普及の情況は大底分かるふと思ひます。加之學校教育の精神といふものが鈍れてをります。學校といふものは智識は與へるが人物は却て惡しくするものだと思ふ様になつてをります。目下流行の學校騒動といふものも詮ずる處教育の精神が鈍れてをるから來るもので御座います。

併し學校教育の不首尾といふものを悉く學校教育の過失の様にいふ事が流行つてをりますが、其過半は家庭も其責に當らねばならぬ。遺傳といふものは個人の發達を妨げ、又は促かすものであります、其由て來る處は主として家庭

にあります故に遺傳、からいふても家庭の善悪は大切なものであります、又小兒教育より申しますれば家庭は其全權を掌握して居ります。或る西洋の教育家が「小兒の教育は生前二十五年換言すれば父母の教育より始めざるべからず」といふたのは遺傳の大切な事をいふたものであります。又本邦で「三歳兒の精神百まで」といふのは家庭教育の必要をいふたものであります。また小兒が學校教育を受くる様になりましてもなほ家庭教育は教育の半部を負擔してをります。然るに子供の教育を學校に一任して出来るものと思ひ、若し小兒の品行が治まらぬときは罪を學校教育者に歸する事を知つて家庭の大いに之れを妨害して居ることを顧みないのは誤りの甚しきものであります。近衛公爵も御述べでござりましたが、教育に従事して居る者が一番困つて居るものは家庭教育の不完全と云ふ事である、幾ら學校で氣を揉みても家庭が悪ければドウしても教育する事は出来ない、それで私は今日の教育界にある弊害と云ふものは其の大部分は家庭に其罪を歸せねばならぬ。それで今日の現状はドウしても家庭教育が完備した家庭教育が振ふて居ると云ふ事は言はれぬと思ひます。

次に教育は學校と家庭のみでは出来ぬ、是非とも社會教育の加勢を得ねばなりません、——社會が善くなければ本當の教育は出来ない。天然教育と家庭教育と學校教育と社會教育との四つが揃はねば人を作る事は出来ない。然に目下の社會は教育を妨たげてをるではありませぬか、青年を腐敗に導びく所の機關は全備して居る、青年を鈍らす所の勢力は振ふて居るが、社會の青年を教育し國民を教育する所の點に至つては亂れて居るばかりでなく實に眠つて居ります。それは私が此で申す必要はないと思ひます。町を歩いて直ぐに青年の耳に入り青年の心に這入るものは何かと云ひますと、如何なる音楽が何處にも聞えて居るか其他演劇、文學奢侈遊逸惰の惡習、輕薄懦弱射利奔名の弊風は如何であると云ひますと、社會の中で人々を教育する所の機關が備はらずして、却て之れに反對の勢力は打揃ふて蠟の如き柔き腦髓に不道德の印を押し居りはせぬか。然るに之に反抗すべき社會教育の勢力は如何でありますか。之を

亞米利加の社會教育に比較すれば我國は大に之を怠つて居ると思ふ、是は一々此で申す事は出来ませぬが亞米利加で、男女共高等の教育を受けたる者は社會教育に目を着けざる者はない。色々な所に住居を定めて教育の無い者と實際を求めて社會の勢力の及ぶことを望んで居る。大學殖民等であります。又通俗講談に非常に金を掛ける、然るに吾が國にては大學通俗講談會のみでしかも未だ社會的教育力とは成てをらぬではありませぬか。又米國にては音楽といひ美術といひ大に教育的勢力を振ふてをります。其他俱樂部とか一々、其例を擧げたいであります、時間もありませんから申す事が出来ませぬが。是れ皆な國民教育をしやうと思ふならば社會に大に注意を要する譯であらうと思ひます。然るに吾が國にては社會的教育は殆ど緒についてもをりませぬ。其の勢力となるべきものは皆敵となりてをる有様でござります。此の様に先づ外形から見て私共は我國の教育は振ふて居る、是れで宜しい是れならば我が日本國民を養成するに足るとはドウしても思はれぬ。

此の様に振はぬと云ふ事色々足らぬ所があると云ふものは此に一の原因があるです。是は教育の精神が鈍つて居る、即ち精神がない、教育が機械的に流れ、形式的に陥りて居りますのも、詮ずる處教育の精神が鈍つて居るからで御座ります。是は社會にも家庭にも學校にも教育と云ふ精神が鈍つて居るからであらうと考へます。私はケンブリッジに暫く居りましてヘネスと云ふハーヴァード大學の教育學教授に交際致しましたが、ケンブリッジは亞米利加で一番教育の盛んなる處でござります。然るに自分の娘が十六七になつて居るに學校に遣らぬ、なぜ遣らぬかと云ふに學校教育を不完全と思つて居る、それで夫婦かゝつて家でやらせて居る、學校へ遣れば樂なのに、時の無いのに自分で教育して居るものはそれだけ教育と云ふ事を重んじて居るのでござります。我國は如何でござります、両親が子女を學校へ遣れば教育は出来るものと思つて居るが、教育は學校にのみ任せて決して出来るものでない、家庭で出来るのである、學校は唯々家庭教育を補ふものである。然るに家庭教育を面倒に思つて構はずして、唯々學校に任せて置けば出

来るものと思ふは大變な間違である。其他亞米利加の小學校でも大學校でも廻つて見ると必ず一の新説を聞きます、新發明を見ることが出來ます、其れはドの大學に行つても教育學の講座を設けて深く教育學を研究し常に新發明を爲しつゝある、之は何の大學にもある。然るに我が帝國大學に於ては文科に於て一の教育學の講座がございましたが故日高文學士が死なれて其の後とを繼ぐ者が無い、廣い日本に一の教育學の椅子を保つて行く事が出來ぬ、又必要のないとは如何に教育思想に冷淡であると云ふ事が分つて居らぬかと思ふ。色々の事業の中に人に一番見えぬは教育である、教育はドウでも宜い、教育家に任して置けば我輩の知る所でないと云ふ様な教育の精神が鈍れて居る、故に教育が振ふて來ぬのである。精神のない身體からだ死んだ身體である、精神のない教育は骸骨同様と言はねばならぬ。

それで私が日頃感じて居りますのは、ドウしても我帝國を偉大にし、國民を育つる上に於ては教育の精神を社會全般に吹込まぬ以上は發達致しませぬ。一般社會に吹込まんと欲せば、是非之を女子に吹込まねばならぬ。然るに女子教育は、如何に待遇されて居るかといふに、一番振はぬは女子教育である、一番人から嫌がられるのも女子教育である、一番人が冷淡にするのも女子教育である、女子教育と云ふ聲を聞さへ人心を寒らしむるといふ有様であります。斯ういふ不遇の有様に陥つて居る、そうして斯ういふ有様を招いたのは一は社會の罪である、又男子の罪である、又一は失敗の罪である、又弊害の罪である。

併し弊害があればある程益之に従事せねばならぬではありませんか、不完全であればある程愈々よゝよ之に熱中せねばならぬではありませんか。然るに失敗に辟易し、弊害を恐れて、女子教育を擯斥ひんせきし、又は之を冷遇するのは目下一般の傾向ではありませんか。是れ實に遺憾千萬なるのみであります、實に國家の一大不幸であります。之が私共が日本女子大學校を創設せんとする所以であります。之れに依つて教育の精神を社會一般に吹き込み之に依つて女子教育の弊害を矯正し、之に依つて女子教育の普及改善を計り、之に依つて女子教育の模範を造り、之れに依つて家庭の刷新を促かし、



之に依て社會の風習を改め、之れに依て教育一班の發達を助けんと思ひます。之れ日本女子大學を創設する所以であります、目的であります、茲に其方針と方法を充分に述べたいと思ひますが到底僅少の時間では述べ盡す事は出来ませんから今日は只日本女子大學校といふ新らしき名を公に致しますに付き、直ちに諸君の心頭に浮び來る疑問に答へる丈に致したいと存じます。

(第一の疑問) は女子に大學が必要なるやといふ事でありませう。今女子大學の盛なる英國に於きましても高等教育を授けんとするや、反對論者は「高等女子教育を主張するは神に對しては罪惡、政府に對しては反逆」だと申しました。米國にても今より二十有餘年前女子大學を設けんとする際に世人は嘲弄ちやうげりして「女子の爲めに大學を設くるは恰も猫に學校を設けてやるのと同ーだ」と申しましたが、今日は最早こゝにいふ説を吐くものはなからうと思ひますから茲に辨ずることは止めませう。

(第二の疑問) は教育の順序を誤つて居らぬかといふ論でございますが、女子大學校と云つても帝國大學に比する様なものではござりませぬ。又米國の様にせねばならぬと云ふのでは素よりござりませぬ。今日は女子教育が尙ほ不完全であるからモウ少し高進せしめ之を完備に至らせたいと云ふのである。徒らに學科のみを高めうといふのでもありません。併し學理を構はぬと云ふのでもありません、學理も大切なものと思ひます。看病にしても、料理にしても、家庭の事にしても精神上の事にしても十分改善しやうと思へば學理も高める必要がござります。けれども順序を誤つて教育を施す積りではござりませぬ。本邦現時の女子の體力智力に應じて順次に高進するの策を取る積りでありませぬ。(女子教育振起策を參考すべし)

(第三の疑問) は女子大學は初等教育の妨げにならぬかと云ふ説が起るのでござりますが、私は之とは丸で反對に考へるものであります。大學校を起すのは、女子教育が普及せぬ故之を起して普及を計らうと云ふのでござります。我

國でも最初に初等教育が出来ぬからと言って、大學校を起さなかつたならば、今日の如く初等教育は普及せぬ。亞米利加でも大學校が多く起つて、初等教育が發達した事でござります。其理由は多くござりますけれども、是も略して置くことに致します。(是に關する理由は女子教育振起策に詳論せり)

(第四の疑問)は女子大學校はまだ早い、其時機が來ないと云ふ事でござります。是も他の國の歴史に就て考へて見ますに同じ事である、さう思ふは當然である。今から二十年前マサシユセツツに於て、スミス女子大學校を起す時に反對が有りました。今でも此の學校の總理シーリーと云ふ人が二十年前、即ち該大學を起す時に二十二年間に四十人丈の大學生を得るにすれば満足だと思つて居つた。此のシーリー氏は二十年前に之を必要と見認<sup>みと</sup>めて着手したが二十年後の今日現在生八百人以上居る、卒業した者は何千人であるか實に多數であります。然ればその時にそれだけの必要があつたのでござります。是が必要になつてから着手しても間に合はぬ、大學校は段々に成長せしめねばならぬから今日より二十年三十年五十年先の事を考へて着手せねばならぬ、急に其必要があるからと言つて遣つても役に立たぬであります。且つ現時高等女學校を卒業し其より進むの道なきに苦しむものを随分見當ります。故に早過ぎる事はないと思ふ。

(第五の反對)は學校が是迄の程度ですら女が生意氣になる、しかるにいま是より尙ほ高くして尙ほ生意氣になれば、ドウするかと云ふ事でありませふ。學問が女を生意氣にすると云ふものは無實の罪を教育に歸するものである。成程今日の女性は生意氣なるが多いが、是は教育の罪にあらざして教育法の罪である、又教育者の罪である。此頃或る學者先生に面會致しましたが、其の時先生は女子教育は反對である、小學校でよい、それから上に行くとき生意氣になるといはれましたが私は先生の様な高慢な人に教育を受ければ男でも生意氣になると言ひたかつたのでござります。さう云う人に教育を受くれば生意氣になりませうが、教育は人を謙遜にするものである。亞米利加は婦人の權利の盛んな

所で、女の活潑な處惡くいへば女の粗暴な所であるけれども、此粗暴を直すは教育である。亞米利加を彼方此方へ行くくと女は粗暴である、けれども大學校に這入って學んだ婦人の家庭に行けば、女らしくて惡いものを退けて仕舞ふた善い女がある。教育が高慢心を造るにあらざ、教育法と教育者の惡いものではござりませう。それと生半着なまはんぱなの教育をすれば男でも生意氣になる、ホンマに學問が出来た人は謙遜である、生意氣は半學問の熱せぬ書生にある。人間は智識が高まるか、地位が進めば謙遜で柔和になる、心が清くなる、小役人より大臣になれば謙遜である。亞米利加でも總理とか校長とか云ふ様な人は柔かく子供らしい、進む程謙遜なものでござります。私は高等教育をしてホンマに女を造つたならば、ホンマに女に高い智識を與へれば、さういふ弊を矯める事は出来ると思ふ。今日女學校の弊は、教育を與へずして直すことは出来ぬが教育を與へて直すことは出来ると思ふ。

(第六の疑問)は德育法はそふぢやろふが主義はどふだか純粹の日本主義か、歐米主義とか云ふ説があらうと思ふ。私は内を主にして外を客にし武士風家庭の精英を標的と致しまして之を補ふに外國の長所を以てするのです。即ち忠孝節義の如き日本固有の美德は益々之を發達進化せしめ同時に諸種の缺點は之を矯正し萬國の最も秀でたるものを取り、我國のものにしたいと云ふ考へでござります。

(第七の疑問)は學校教育は人情に疏とほくなる、世に處する事を知らぬようになる、交際が下手になると云ふ評であります、是もホンマでござります、是も寄宿舎で養ふて居るのでござります。寄宿舎を改良せねばならぬ、今日ある者は兵營的である、監獄的である、故に寄宿舎を家庭のようにせねばならぬ。人は温かい内に育てねば、温かい心を持つた者にならぬ。今回は寄宿舎このたびにては一軒を家族制に改めまして數多の別戸寄宿舎を設けて各戸を一族と見做し全舎を一族親類と見做し家具裝飾等本邦家庭の善良なるものを模範と致し日々家庭の生涯を營む様にしたと思ひます。然れば掃除もせねばならず、お客の相手もせねばならず、面倒も見ねばならず、萬事家庭の境遇に遠からぬやう

にせねばなりませんから、中の仕組も家庭の様にして、母の様な舎監を置いて、其中に家庭の様な精神を吹込みたいと思ひます。

(第八の疑問)はそれはよいがさう云ふ舎監が在るかといふのでありますが是が素より我國で一番困ることですけれども私は此處でさういふ人を造らねばならぬと思ふ。ドウも善い母がない、善い妻がない、善い教師がない故に此の學校の必要が起るのであります。併しながらそふ善い教師は皆無といふとそふでもないから今稀にある人物を集めて追々此の目的を達するの法はあると思ひますが、是も時が足らぬから、今日は略しやうと思ひます。是迄に八ツの疑問に答へましたが之は精神上に關する疑問でしたが尙ほ身體上に關する疑問が必ず出ると思ひます。

其は、女に教育を授ければ女を弱くすると云ふ説があります。私は之に反對の考を持ってをります。日本人は弱いである、小さい、是は丈夫にならねばならぬから高等教育をせねばならぬ、成程女學校の生徒は弱いとか、背が屈んで居るといふ統計を見る、男子の大學校もさうである、大學校に這入ると段々弱くなる、量目が減つて來て、弱くなると云、昔から學問で死んだ者が随分有る。亞米利加でもさうであつた。クラークといふ人の書物にも多くの女子教育の弊が擧げてあるけれども今日は米國にては丸で違つて居る、今日は大變丈夫になつて、學校に這入つてから卒業して出迄には、肺量が増えて居る、身體が重くなつて居る、又學校外の婦人よりも學校内にある婦人が健康である男子もさうで大學生徒は身體が重くなつて居る。それは體育の獎勵と體育學があつて大學生徒も兵隊や力士の身體を鍛ふやうに遣つて居る、毎日統計を取つて遣つて居る。女子の方もさうである。最う一ツは體育學と云ふものが起つた。是は昔から國の榮えた所は、ギリシヤでも羅馬獨逸でも英國でも體育を重んじて居る、又體育學が盛んに行はれて居る。是は醫學と生理と解剖から成つて居るもので、醫學の智識を女子に與へねばならぬ、又國民に與へねばならぬ。是が日本女子大學校に體育部を置た所以であります。體育の教師を拵へて、之を諸方の女學校へやつて、此體育の精

神を起したいと云ふ考へでござります。英國の諺に、人は三十に成れば醫者か馬鹿かと言って居る。米國にては年二十に成つて身體自衛の道を知らない婦人は馬鹿だと申しますが自衛の習慣と知識とは女子の身體を健全にし道徳を健全にしかつ小兒を健全にするに是非缺くことができぬ故に日本女子に醫學の思想を與へねばならぬ。日本の女に是非教へねばならぬ事が澤山有る。又之を實行させねばなりませぬ故に女學生には時間の許す限り自炊又は洒掃さいぎょうの勞を取らせて勞働に習はしめ勞働は神聖なるものである決して嫌惡すべきものでない輕蔑すべきものでないといふことを知らせかつ身體と心靈をも鍛はせねばなりませぬ。それで高等教育を主唱するは、身體を悪くするにあらずして之を下ウか取戻さうと云ふ企てでござります。

是迄種々申上げたが時がござりませぬで、是で終りますでござりますが、諸君の中に私の説に御同意であっても、或は反對の點が有るにしまして女子の教育と云ふものは、國民の爲め一日も忽せにすべからざるものであるといふこと今日の儘で抛なつて置くべからざるものであるといふ事は、御同感であらうと思ひます、ドウか諸君は、此女子教育の爲めに御助力下さる様に切望致します。尙ほ先輩諸君の御高諭を仰ぎたいと希望致します。(拍手大喝采)

## 女子教育振起策

本篇は帝國教育會に於て演説したる事項の筆記に係るものとす

今日は、教育に熱心なる諸君の前で、不肖の私が聊か卑見を述べる機會を得ましたのは、誠に光榮と存ずる處でございます。處が私の題は「女子教育振起策の一端」と云う題でございます、勿論學理學說を講ずる積りでなく、唯私の所懐の一端を諸君に御訴へ申すのでございますから、往々卑近に涉るかも知れませぬ。其邊は前以て御了承を御願ひ置きます。

私は數年前に亞米利加に遊びましたが、ぼすとんへ着するや間なく某紳士それがしの饗應に招かれたことがある、其席上で、話の序に私は一の問を出したのである、即ち「貴國で青年と云へば、何れ位の歲恰好の者を云ひますか」と尋ねた、然るに其答は「二十五歳から四十五歳まで」と云ふことであつたのでございました。次に私が饗筵に招れた時に、其席上の慷慨談の中に「私はもう少し年齢が若つたら云々」と云う言葉を使つた、處が一座大に笑つた、其譯は二十五歳から四十五歳までを青年と云う亞米利加人の眼には、私位の年輩の者は「ボーイ」boy と思つて居る、米人は斯う云う氣風でありますから、日本とは色々違つた現象を度々見ます。私はぼすとんから極く近き處のあんどばあと云ふ「たうん」town に往きまして、或家に泊つて居りました。處が問も無く其隣家に婚禮があつたのでございませぬ、其花嫁さんは通常の如くに二十六位であるかといふと廿六を逆に讀んだので、即ち六十二歳で初めて婚禮をするのであります。事實本當でございます。又婿さんも七十以上の人でありました。夫から私は此家の人と心安くなつ

て度々馳走などになりました。六十以上で肇めて婚禮すると云ふことは甚だ不思議に思はれた。夫から又もう一つの例は、男子の方は四十歳位で、嫁さんは三十五歳で結婚しました。夫から三年ばかり経ちまして、私は、ズツと中央市しかぐち俄高の方に旅行をして、其近隣の「タウン」に往つた時に、前に申しました友人の親の處に一寸尋ねた、是は其友人の父親と、さうして其妻の母親とが婚禮をしたのでありまして、自分等の子供より後に婚禮をしたので、その年齢は双方六十歳以上であつたのであります。學生間にも往々随分日本では老人中に數へられ隠居でもしそんな年輩の者が居り升。私が或大學に這入つて見ますと、其處には四十五歳の學生が居りました、此の學生は二十年間新聞記者であつた人で妻子を携へて來て居りました。そふして其娘は己に十八歳で、父と同じ學校に勉強して居りました。又或女子大學に參觀に行きました處が其時恰五十五歳の老媪が入學したと云つて居りました。勿論斯云う例は澤山だとは申しませんが、三十以上の學生は随分澤山居ります。日本では斯う云う例は先づ皆無と云つても宜しかろふと思ひます。私は日本人も米人の様に七十前後になつても婚姻すべしなど、又は妻子を携へても、老婆になつても、勉強せよとは穴勝申ませぬが、兎に角日本人も米人の様に若い氣を何時迄も持つて行きたいものだと思つて居ります。

扱て私共が皆な能く知つて居つて別に耳新しいこともありませぬが、吾が國少壯男子の好んで口吟する處の名句に

「男子立志出郷關學若不成死不還」と云ふ句が御座います、またすからちこぶがまなはいまぞくしゆいらなむを志すことにはいほしむを「又自喜豪氣猶未摧、每經一難一倍來」といふ句は年を取ても困難に出逢ふても豪氣は益々殖えるといふのであります。是等の句は宜くも偉大の人物の氣象を描出して居るものと思ひます、此精神、此活氣此元氣を缺きました時には、齡が幾ら若くとも、幾ら身體が丈夫な人間でありましても、其はもう役に立たない、老朽なる、もう望を屬するに足らない處の人であらうと思ふのであります、偉大な人物の資格に種々ありませうが、兎にも角にも如何なる境遇に立ちましても、何等の境界に際會致しまして、何等の困難に出逢ひましても、何う云ふ強敵に攻撃されましても、此精神、此氣象、此元氣を持續けて、何時々迄も、進

み進んで常に偉大にならう、偉大にならぬければならないと云ふ氣象を以て居る者が取りも直さず偉大な人物であらうと思ふ。夫で古今俊傑と呼ばれ、或は君子と云はれた人の事蹟を考へて見ますと、其頭の髪は眞白になり、頰骨は高く秀でて、身體が自由に利かないといふ歳になりましたも、其精神は活氣に満ち満ちて、奮勵勇進して往く、何時迄も向ふに往くと云ふ氣象のあるものでございます。斯う云ふ者は仙人とも云ふべきで恒に綠髮童顏の有様でございます。併し是に反して、齡は縦令青葉たぐえの如く若くても、早やその精神は活氣なく恰もあの枯葉の萎縮して、生命もなく、光澤ひかりもないと一般でございます。夫で斯の如く年齢は若くとも、其精神は既に萎縮して仕舞つた、活氣のない年若い老人青年は其生涯に於て、決して見るべき程の功績の擧らぬと云ふことは分り切つた話だらうと思ふ。是は一個人に就て眞理であるのみでございます。亦た國民の上に照らしても同じく眞理であらうと考へられます。

然らば、我日本國民は少壯せうじゆう有爲いうゐの日本國民でございますか、將た老成を氣取つて居る年若い老人國民でありませうか、之は今日我々國民たる者の考へねばならぬ處の問題であらうと思ひます。之を歴史に徴し事蹟に照しますと、我大和民族が呱呱の聲を敷島の大和島根に揚げましてから、爾來實に二千五百有餘年の長い歲月を過ぎ去つて居ります、決して若い國民とは言はれない。併しながら、我日本國民と云ふ者が、世界列國の間に立つて獨立自治の體面を以て待遇さるゝ様に成つたのはつい明治二十七、八年役後でございますして其發達上に於きましては、まだ／＼若い國民であらうと思ふ。此二千五百年と云ふ山鳥の尾のやうに長い月日は、此日本國民が一大國民とならんとする豫備に過ぎないであらうと思ふのでございます。夫で、今や我日本國民は少壯せうじゆう期きに達したばかりの國民であるから、遠大の志望を抱き、元氣に満ちて活氣に富むで、是から進まなければならぬ、是から志を立て、往かなければならぬと云ふ氣象を大に抱いて居らなければならぬと思ひますが、併し之は一の疑問であらうと思ひます、即ち我日本國民は果して然るや。果して然るや是が疑問であります。若も萬が一にも不幸にしまして、彼國民的識見もなく、國民の統一の



必要なることを感じない、無教育極まる支那人に勝った位の些々たる事で嬉しがり、歐米の制度文物を輸入消化した位な幼稚な事柄を以て、やれ文明だとか、開化の國民だとか云つて鼻を蠢うごめかして、進み進むで止まないと云ふ氣象を鈍らずやふなことが、今日あつては、此日本國民も岌々乎きうきうことして亦た危いかなではありませぬか。

諸君、我日本國民は遠大の志望を抱き、活氣に滿ち滿ちて居るべき筈の此日本國民をして此後幾萬年を経るとも、希望の後に希望を増し、何時までも進歩發達して偉大なる國民になりたいと云ふ精神を持たせたいと云ふことを、御互に希望するは當然であろうと思ひます。何うすれば我國民は偉大に發達するかと云ふ前に述べました處の精神が無い以上は、決して大きくならないのであります。此元氣、此精神が、何時も國民の心中に滿ち滿ちて居らぬければ、決して國民は偉大にならない。

私は此處に偉大の國民と云ふ字句を使って、さうして、富強の國民と云ふ言葉を使ひませぬのは、此は少し思ふところがあるのでございます、富強の國民と申します時には物質的方面に傾いて居るところの國民の發達を表はす言葉でございませぬ。偉大の國民と申しますれば、此物質的發達に加ふるに、精神的發達を以てして居りますからして、一方に偏しない、完全なる發達の國民の發達を表はします言葉であると思ひますから、私は故意わざと偉大の國民と云ふ言葉を使ひました。固より私は兵が強くなり、國が富むやうになるのを欲しないじゃない、其必要を認めぬのではないのでございませぬ、今日軍艦を殖ふかし、兵力を進めなければ、決して我國の體面を維持して往かれないと云ふことは誰にも分つて居る咄はなで、兵力を進めやうとするには、益々富の力を借りなければ出來ないと云ふことは分り切つた咄である。併し乍ら此富強と云ひ、又物質的の發達といふものは精神的發達に基礎を置いて兩々相伴ふて進歩しなければ、決して健全強固の發達を見ることは出來まいと思ふのであります。

然らば即ち日本國民を少壯にし、國の精神を若くすることが、國民を偉大にすることになるかと云ふに、是は固より

申すまでもないことで、此日本國民は老成を氣取つて、小成に安ぜず、何時も少壯の若い氣になつて、大志を抱いて、活發發地に活動して進歩發達して往くならば、偉大になるまいと欲しても出來ませぬ。固より前に申した如く、此國民を若くすると云ふことは、年齢を若くすると云ふ譯ではない、年齢は幾ら年取つても構はない。唯國民が理想を有ち、抱負を抱き、大志を立て、進み進んで目的に向つて行くならば、其が即ち少壯になると云ふ譯であらうと思ふのであります。而して此國民の國家的感念から出たる高尚の志想及遠大の志想を湧出せしむる原動力を作り出して來るところの泉源は、何であるかと申しますならば、是は申すまでもない、教育である。教育と云ふものは、一方には國民に理想を抱かしめ、大志を樹立せしめ、又一方には其大志を成就せしむるものであります。

然るに教育と申しますと、直ぐ様誰でも男子教育のことより考へないと云ふのは、世の通弊であらうと思ふ。併し女子教育と云ふものは、此教育の根源である、基礎でござります。勿論教育と云ふものは、家庭教育の本尊たる女子教育から着手しなければ決して本當の發達はしないものである。根本基礎を持たないとこの教育は架空の教育である。夫で女子教育を缺いて居る處の教育は、片輪の教育どころではない、根本、基礎を缺いて居るところの教育であると思ふ。是は教育家諸君の明かに御承知のことであらうと思ふ。常に、感ぜらるゝところであらうと思ふ。そこで女子教育を缺いて居る國は亡國にあらざれば弱國でございませう、然らざれば野蠻國でございませう。是はもう誰も否定することの出來ない古今東西の歴史に顯れて居る處の明かなる事實だらうと思ふのでございませう。夫で私共は、此國家の基礎を築いて、眞に此國民を偉大にしようと思ふならば、何うしても女子教育を盛にせねばならぬ、女子教育から始めなければならないと云ふことは、實際であらうと考へる。然るに國民を偉大にするに缺くべからざる、女子教育と云ふものは如何であるか、日本の臣民は此教育に對して、如何なる感念を持つて居るか、若し今日戦後の經營としまして、國防や殖産工業にのみ力を入れて、百年の大計を定めんとしたならば、——而して、教育事業を後と廻

しにするやうなことがござりましたならば、我國は一時勝利を得るも、其の榮譽を永久に維持して往くことが出来ませうか、將來一旦緩急がございましたならば、我國の國光を損しないかと云ふことが出来ませうか、世界に頭を出した日本が世界列國文明社會に立つて、彼等と肩を並べて文明社界に驅逐して往くことが出来ませうか、固より日本の教育は、日進月歩の有様であります、決して進まないとは申しませぬ。併しながら、日清戰爭以後、他の事業の勃興に比較致しますと誠に嘆息すべき節々が澤山あると云ふことを自ら感じて居るのでございます。

今是を實際に照して少し、考へて見たいと思ひますが、………  
 ……米國に於ては千八百八十八年の調査に依りますれば、大學女生徒、但し男女混合大學、或は女子大學の區別なく總數は四萬二千六百六十三人であり、實に全合衆國男女大學生の百分の三十以上に位して居ります。然るに其後七ヶ年間に於ける高等女子教育の進歩は實に著しいものでありまして、女生徒の數も段々増加致し、大學の新たに出來たものも少くござりませぬから、従つて女子生徒の數も増して居ることは疑はござりませぬ。今二三の例を挙げますれば、當時すみす女子大學の生徒の數は四百位でありましたが一昨々年私の參りました時には、七百五十以上に達して居りまして校舎を増築しなければ新入生を入れるの餘地がない有様でございました。ぶりんもー女子大學は當時創立の際でありまして女學生百名に滿ちませぬでしたが、今日では四百名以上に達して居ると云ふことでございます。はーばーど大學の如きも一昨年に至りまして、其附屬女子大學を今の本校に合併致しまして、女子にも男子同様の特權を授け、且同一の學位を與ふることゝ致しました。其他之に類する進歩は數々ありますが餘り管々しうございますから申しませぬ。殊に中等普通教育に至りましては前に申上る通り女學生の方が遙に男學生の數に超過して居りますやうな有様です。斯の如く獨り亞米利加のみならず、歐米の女子教育と云ふものはズット進むで居る。然るに本邦では二の大學で事が濟むで居る、四千萬以上の人口を有する我國には僅に高等學校六ッしかない、又其生徒

の數も彼國の生徒の數と比較して見ても餘程少ない、歐米では教育のために年々歳々巨萬の金を費して居るに、日本では僅かの金で濟むで往く、僅の學校より要らないと云ふのは何う云ふ譯であるか、金が少ないからであるか、富の程度が低いから教育を受くる者が少ないのか、夫も原因でございませうけれども金が少ないから學校が立たないのでござりませぬ。未だ教育の普及發達が其處までに達しないからで御座りませう。

合衆國では其圖書館が教育の主動者となつて働いて居るはずとん新約克ひらでるひや市俄高の如き大都會は素より皆各々大きな圖書館があるのみならず、山村僻地に於きましても津々浦々に迄苟も人間が少しでも集つて住居して居る處には必ず一の公立の圖書館があつて書物が一杯に藏に満ちて居ります。毎日其書物は大働をなして居ります、實に書籍は順廻訓導となつて人民を教育して居るのでござります。此處にもう一つ珍しい事實がござります。此書籍館に往つて餘計書物を借覽する人間は何う云ふ者でござりますかと云ふと、婦人でござります。洗濯婆や下女や、そんな下等社會の婦人が書籍館から書物を借りて來て讀むで居る。然るに我國では東京に一の圖書館があるのみで讀み手が何れ丈ござりますか能く覺えませぬが、何にしろ我國の圖書館の一つでもあるのは賀すべきことでありますが、彼の大都會なる京都、大坂には一の圖書館もござりませぬ。村々に往きますれば何にも無い。之を以て見ても、未だ日本の教育の、充分に普及して居らないと云ふことが分ろふと思ふ。

一體我國に於きましては一番遅れてをる事業は、百年の大計を要する事業で何分、之は只形而上の事のみならず、形而下の事もそふであります。それで事業の中で一番發達しなければならぬ事業が一番遅れて居ります。我國で一番大切な事業は何であるかと云ふに、私は山林事業であると思ひます。我國のやうに山の多い國はない、其山に繁りて居ります處の樹の利益と云ふものは、莫大なるものでござります、又其山林の川河に及ぼす影響と云ふことは、是亦實に非常なものでござります、即ち其山林の伐採の仕方によりまして、或は干魃にもなり、或は洪水にもなるもので

ありまして、實に恐るべきものであります。然るに此山林事業が、一番後と廻しにされて居る有様であります、一番研究の附かないものは、山林事業であらうと思ふ。而して教育事業と云ふものは、山林事業よりも其結果は目前に現れない仕事でございまして、殆ど人民の眼には形は現れて來ない、夫であるからして、人々は此問題を等閑に附す傾きがある、殊に女子教育は男子教育より結果が能く現れない、夫故に尙更人が打遣つて擱きます。けれども此女子教育と云ふものは最も大切なものであつて、是は實に國家の隆替、盛衰に關係する事業でございませう。然るに唯眼に見へる目前の事ばかりに眼を着けて仕事をして居りましたならば、此百年後の日本は何うでございませうか。諸君の御承知の通り、五十億「ふらんく」の償金を取られ剩へあるさす、ろうれんの二洲を割かれたる佛蘭西は、其屈辱を雪ぎ、其鬱憤を霽し、其國威を宣揚するために大なる事業に着手した、其事業は何であるか、教育事業である、殊に女子教育事業でございませう。固より佛蘭西と日本とは、其事情を異にして居る、佛蘭西は負けて日本は勝つて居る、併しながら、勝つて兜の緒を緊めよと云ふことは、今日服膺すべきものと存じます。私は此日清戦争の勝利と云ふものは、教育家の勝利であるようにいゝますが、併し教育家たるものは、今日の現状に安じて、得意になつて、深く考へ遠く慮らなくして、夫で教育家たる者の責任が竭されて居ると考へて宜しうございませうか、是が即ち私が自分の不肖を顧みず、女子教育の振起策を講じて見たいと思ふ所以でございませう。

現今我國女子教育を由ひ起すに、種々様々の方法がござりませうが、私の卑見に由りますれば、詰り是は二の方法に歸すると思ふ。其一は下から上に及ぼして往くのと上から下へ及ぼして往くのと、斯う二つであると思ふ。即ち初等教育から段々高等教育に及ぼし、高等教育から初等教育に及ぼして往くと云ふ此二つである。即ち上下兩端より同時に着手して、相應援して、相共同して行つて往くと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと、今日我國に帝國大學と云ふものがござりまするからして、そこで我國の中學校や小學校が今日の如き有様を呈して居る

のでございます。是丈進歩して居るのでございます。また今日小學校や中學校があるからして、現に大學校があるの  
でございます。女子教育も其通りでござります、初等教育から、段々高等教育を施して、普及發達せしめると云ふこ  
と、高等教育から初等教育に及ぼして往くと云ふこと、即ち下から段々高い處に及ぼして往くと云ふのと、高い處か  
ら下へ及ぼして往くと云ふ、斯う云ふ二つの方法に歸しやうと思ふのでございます、是は私の考でござりますが、其  
振起策として三つの項を擧げたいと思ふのでございます。

第一は教育家自身が警醒すること。

第二は女子教育の方針を確定すること。

第三は女子に高等教育を施すと云ふこと。

今日我國で、女子教育は男子教育に較べますと振はない、睡つて居る。此やうに女子教育が振ないと云ふことは私  
の考へる處では其罪は誰に在るか色々な人があるが、最も先に責めなければならぬのは教育家それ自身である。何ぜ  
教育家の罪であるか、教育は今日眠つて居る、元氣がない、何ぜ元氣がないやうになつて、何ぜにぶれて來たかと云  
ふと、女子教育を行つて、今日迄に色々な失敗を重ねて來まして、其失敗を懼おそれて居ると云ふのが一の譯でございま  
す。もう一つは一般の人々が女子教育の事には冷淡に成つて居るからして、自然と教育界が活氣を失つて來たと云ふ  
二つの譯だらうと思ふ。初め女子教育のために手を焼いて大失敗を來して居るから大に懼れて再び手を出して見る勇  
氣がない、其失敗から、段々弊害が生じて來て居る、是は本までございます。弊害は確かにある、私は確かに認めて  
居ります。そこで斯う云ふ弊害が起つたから、其弊害を懼れて、女子教育に手を出すならば、再び弊害を來すであら  
うと云ふことを恐れて引込主義になつて、まあ／＼觸らぬで措た方が宜いと云ふことでないかと思ふ。而して自らが  
唯だ引込主義を執つて居るならまだしもの事自らが教育の必要を説いて聽かせて、世の先導者とならなければならぬ

處の身分でありながら、却て女子教育の弊害のみを説いて、矯正策は講じない、弊害は困つたものだと言つて、第一に教へて居る。斯う云う工合に、世間一般に冷淡であるからして教育界も矢張冷淡になつて、睡氣を差して居る。そう云ふことでは何うも私共は濟まないと思ふ。何うでも宜いことなれば、眞に國家を思はぬならば、其でもよいが眞に百年の日本でない、萬年の我國を思ふならば、私共は然ふ云ふ有様で居てはならないと思ふのでござります。

凡物事には一利一害と云ふことは免れぬものであります。少しも弊害を生せず、利益ばかりを取らうと云ふことは何しても出来ないものでござります、失敗を爲ぬで、成功しやうと云ふことはどうも出来ないものでござります。詰り此失敗と云ふ教師に、教育されて夫から後に成功するのであります。私共は失敗と闘はなければならぬ、弊害と闘はなければならぬ、軍をせむければならぬ、軍をせずして勝利を得ると云ふことは決して出来ない、此教育事業も戰爭同様でござります。何うしても負ることもあれば勝つこともある、勝つてばかり居ると云ふことは何うしても出来ない、日清戰爭は負けたことではないと御しやる方もありませんが、是は相手が弱かつたからの咄です。若し相手が佛蘭西、露西亞のやうな、凡そ同等の力の有る國とやれば、そう旨くは往かぬ、負けたり勝つたりして遂に終局の勝利に舉るより仕方ないのである。彼華盛頓或は彼得帝の如き、實に英雄豪傑で大勝利を得た大將でござりますけれども、彼等は又初めから勝つたのでなくして、彼等の軍は殆ど連戦連敗幾ら負けても決して屈しない、負けて益々雄を鼓し、敗れて益々計を運らし決して一朝の敗北に恐れて憶病神に取付かれて、引込主義を取らず、益々勇往敢進すると云ふ氣象に富むで居つたから、彼等は勝つたのでござります、彼得帝は何と云ひましたか、我に戦勝を教へたものは我敗北である、我敗北が我に戦勝を教へたと言ふて居ります。是が勇將の勇將たる處でござります。女子教育も其通りで何れ手を出したならば、失敗することもござりませう、又弊害の生ずることもありませう、従つて攻撃する敵が起つて来る、さう失敗を怖がり唯放任主義を執つて打棄て、措て、夫で我國の女子教育が完全になりますか、何時改む

ることが出来ますか、振って來ますか、女子教育を改良せずに措て、全般の教育と云うものが、振って参りませうか、若日本の全般の教育が發達しないならば、如何にして日本を偉大なる國民とすることが出来ませうか、そこで私共は此處に思ひ切つて失敗と闘ひ弊害と闘はなければ、我々の目指すところの勝利は得られまいと思ふ。

今此處に他の國の例を擧て見ますに、今日一番女子教育の盛なる國は亞米利加でござります、亞米利加が初めからあゝ云ふやうに、女子教育が盛になつたと思ふのは大變な間違である。

スミス女子大學を起したスミス夫人の郷里に白髮の爺さんがあります、此人は能く其當時の有様を記憶して居りました、私に嘗て言ふて申しますに、はつとふゝあるど郡の住民にして、大に勢力ある何某と云ふ者がありました、此人は男子とては一人も無く、女子のみ多く持つて居りましたが、此女兒をば公立學校に入學させやうと思つて、之を衆議に訴へた、其理由とする處は、私は教育費を出して居る、學費を出して居る、けれども、私は男兒を持たないから、何うか女兒を入學させて呉れと云ふた、其時に全郡擧つて其人の説を攻撃したと云ふこととござります。亞米利加で女を教育しない、學校に入れなかつたのは、つい此間迄のことであつたのでござります。米國に於きましても、最初は女子教育は非常に女の身體に害を與へるものである、女の身體を玉無しにして仕舞うだらうと云ふ説があり、又實際弊害もあり、攻撃もあり、失敗もあつたけれども、亞米利加の人間は決して失敗を怖がり、攻撃を懼れなかつたのみならず、益々改良を加へて悪い處は改めたのでございます。今日亞米利加の大學の女學生の身體は立派である。英國に於きましても亦同一でありますが、不列顛醫學雜誌に「吾人は今日に至る迄次代の國民に關して往々悲しむべきの豫言を聞きしも今や豫言の時代は將に迅速に其終りに達せんとす、烏兔匆々二十六年の星霜は經過し去て、吾人は見て以て果して悲しむべきの國民なるや否やを斷定すべきの新國民は出來せり、然るに學位の稱號を有せる母親の子女は學位を有せざる普通の母親の子女と同しく、健且つ美なるを見る、而して子供の健且つ美ならざるものあるは、



正しく両親の罪惡と不攝生より來るものにして、決して両親が教育を受け身自らを制し、又は心を使ふより生ずるものにあらざるや明白なり」と申ました様に英國に於きましても、女子がケンブリッヂや、オックスフォールド大學で男子と同一の學科を研究することの出来る様になつてから、既に二十有餘年であります。更に身體を害した證據しやうせきは見ませぬ。此の大學教育と女子の健康との關係に付きましては數年前英國のシヂウヰツク夫人が調査致しました結果に依つて見れば、十分明瞭であります。

此間日本の高等女學校及び帝國大學の統計表を見ましたが、其統計表に依つて見ますと、高等女學校及大學の生徒の體量や肺量なみ杯が減つて居る、是は何うも教育の行り方の十分でないと思ふ處から、さう云ふ結果を表はしたのでございます。夫で何うしても何處の國でも、色々の失敗、弊害の起るものでござりますから、其弊害と闘ひ、其失敗と闘はなければ、本當の發達の點に達することは出來まいと思ひます。私は今日滿堂の諸君に對して、又我國の教育界に對して、熱望するところは、今日は私共が女子教育のために傍觀して、何うなつても構はないと云つて打やつて措く時ではないと思ふ。今日は女子教育の必要を、御互に力を合せて唱道致しましたならば私共が熱心に女子教育のために竭つくしましたならば、必ず我國の教育の有様は一變して來るであらうと考へるのであります。

處が此處に一の難問題がある、或は諸君の中にさう云ふ御感じがあるかも知れませぬが、夫は私共は固より女子教育の必要を知つて居る、此教育の大切なりと云ふことは分り切つた咄でございますが、女子教育を主張するに、未だ女子教育の方針が十分に立たない、何うして宜いか分らないと云ふことでございます。私は此頃女子大學を興したい考がございました、有名教育家學者、其他有力の人々に面會致しましたが、其の時最も能く私の聽く處の説は、「何うも女子教育については困る」と云ふのが、一番能く聽く聲である。夫から「何うして宜いか私共には未だ考案がない」、「私は女子教育に就て調査研究する還まへがなかつたから、此事に就ては宜いとも悪いとも云ふことは出來ない」

斯う云ふやうな説が多いのでございます。随分有名な人の中にも、さう云ふやうに感じて居られる方があるのでございます。是は私は何うも、教育家自身が既に其方針に迷ふて居るからして、畢竟女子教育が振はない原因をなすのであらうと思ふ。實に日本の女子教育の有様は、方針が定らない、未定の有様である、そうして唯其儘に打棄て、置いては、何時迄立っても方針が定らない。此第二維新ともいふべき大切な時代に於て、女子即ち國民の半數を占めて居る處の女子を教育する方針が立たないと云ふて、私共は此教育をさう構はないで措て宜しいか、世間一般の人は或は夫でも宜いか知れませぬが少くとも教育家——教育に従事する處の者は、是非職務上深く研究調査して、女子教育の方針を確定すべきでないかと思ふのです。此方針を極めることは六づかしいやうであります、力を出して行きさへすれば、出来ることであらうと思ふ、何ふしたら宜しいか、方針が何うも立たないからと云つて、手を束ねて居る譯には行かない、机の上で愚圖々々考へて居り、書物を讀むでばかり居つたと云うても、本當の方針と云ふものは立つて来るものじゃあるまいと思ふ。先づ方針を確かと定めて、さうして以て行つて見る、試験して見る、經驗して見る、即ち實驗に訴へて行つて見ると云ふことも一つはしなければならぬ。もう一つは學理に照して研究調査して見ると云ふこともなくてはならないであらうと思ふのでございます。併しながら、是迄のやうに唯猥りに輕卒に方針を定めて、獨斷的に極めて、朝極めたものが、夕べに動くやうなことで済まないののでございます。此處に女子教育の方針を定むるに必要な條件は二つあると思ひます。其第一は、女子の天性能力と云ふものを、研究調査して女子の能く働き得べき一般の範圍を極めること、第二は國情上時勢上より即ち社會的觀察を下して、此一般の女子の働き得べき範圍に變更増減を加へて、將來日本婦人の當さに働べき範圍を定めて來ると云ふ、此二ツであります。それでこの二のことが極めて來ますと云ふと、此女子教育の方針と云ふものが自然極めて來やうと思ひます、私が聊か研究しました結果の項目丈を申しますれば。

第一女子を人間として教育すること。

第二女子を日本婦人として教育すること。

第三女子を日本國民として教育することです。

此區別順序を過つたならば、片輕かたわの教育になりませう、此區別順序に就て私は色々申上たいけれども、もう時間がな  
いから項目丈擧て置かうと思ふのであります。

夫から私は女子教育の方針の一として、又振起策の一端として、高等女子教育と云ふものを主張致します、處が此高等女子教育と云ふものは、随分攻撃のあるものでござります。第一の問題は、若高等教育を行つと云ふと、日本の普通教育——初等教育を妨げやしないか、もう一つは未だ日本の初等教育と云ふものは普及して居らぬのに、此處に高等教育に着手するのは順序を誤つて居りはしないか、斯う云ふ議論がござります。私は此處に此高等教育を行つと云ふのは、初等教育を妨ると云ふことでない、反對です、初等教育を助けること、考へます。今高等教育を行つと云ふことは、初等教育の普及を妨でなくして却て早めて往くと云ふ結果を生ずる考であります。夫で私は辯じて置きたいと思ひますが、高等教育を行つに女子大學を興すと云ふことを申上ますと、或は帝國大學見たやうなものを、女のために興すかと云ふやうな疑問が起らうと思ふ。一體此高低、上下、大小とか云ふやうなことは、比較的の語でございませう、即ち高等教育をやると云ふは、現在あるところの程度より高い處の程度に高めると云ふこと、大きいものをやると云ふことが、高等教育と云ふ意味であります。即ち私が高等教育或は、女子の大學を設立しやうと云ふのは、女子現在の者よりも進歩したる發達したる程度に高め而して社會の進運を計ると云ふ希望であります。換言すれば、高等教育を行つと云ふことは、今日の女子の智力、體力、徳力を今日のものよりも高めると云ふのでござい  
ます。今日女子教育の弊害が多い、依つて兎に角此弊害を取除いて、完全なる女子教育を進めたいと云ふ意味でござい

ます。即ち今日は半出<sup>はんしゅつ</sup>來の婦人が多いから、もう一層進めて全くなるまで、女子教育を行つて見たいと云ふ冀望である。夫で決して、帝國大學で讀むで居るやうな書物を讀ませると云ふやうな考へでは無ひのです。もう一つ是に就いて辯じて置きたいです。此教育と云ふもの……教育の精神は、さう云ふ間違はないと思ひますが、教育と云ふものは、書物を教へることであるから、完全なる教科書と善き教師とさへあれば出来るように思ふ人もあるかも知れませぬが、是は大なる間違である、固より完全なる教科書と善い教師は教育の要素であるが、其外之に勝りて決して劣らざる要素が二つある、其一つは遺傳であります、もう一つは抱圍であります、此遺傳と云ふものは大切のものであると云ふことは、誰も不同意はない、然るに此遺傳と云ふものを善化利導すると云ふことは、實に百年の計で一朝一夕には出来ないことでございます。此遺傳に就きまして、一番重い原因は、私は結婚であると思ふ、結婚上の惡弊や過失は惡い遺傳を作るところの重要な原因であると思ふ。然るに、今日我國に行はれて居る馬鹿らしい婚禮と云ふものは、實に私共は常に認めて慨歎して居る處でありますが、是も女子教育を高めて、智育徳育を進めて往つたら自ら止むで仕舞ふだらうと思ひます。さういふ風に結婚の弊習を改めたならば、此遺傳と云ふものは大に改進して來るに極つて居る。もう一つは將來に關係がある、一番大切な關係を持つて居る、婦人の智徳を進めましたならば、其社會の有様が變つて來ると云ふことは、事實であらうと思ふのでござります。女子教育と云ふものは、目前の結果が見へないけれども、是は大切な事業であつて、一日も忽<sup>ゆるがせ</sup>に出來ないものであらうと思ふ。それで今日女子教育に弊害の多いと云ふことは女子教育其のものゝ罪でなくして、教育家及教育法の罪である。且亦今日の女子教育の弊害又は男子教育の缺點と云ふ者は決して獨り教育當局者ばかりの罪ではないのです、社會の罪が大に與<sup>あづか</sup>つて居ります、家庭の風儀が亂れて居る事やら母親の詰らない事などが大に加勢して居ります。然るに高等教育を受けました女子が殖えて來ますと、其影響と致しまして必ず社會の惡風と云ふ者が改まり家庭の風儀が善くなりますから、自然の結果として

家庭教育と社會教育とが善化致しまして學校教育に協同助力し、從て完全なる教育を施すことが出來、本眞ほんまの人間を  
作ることが出來ると思ひます。

もう一つ申して置きたいと思ひますが、前に高等教育と教育の普及發達との關係を述べましたが、私は高等教育と云ふ  
ものが、女子教育振起策の一と云ふ所以は、三、四個條ござりますが其一は、若し此處に高等教育を施しますと、一  
般の婦人が其處まで進みたいと云ふ希望が生じて來る、其處まで進みたいと云ふ希望を以て居る女子が殖へて來る  
と、今度は中等まで進みたいと云ふ女子が殖へて來る、中等まで進みたいと云ふ女子が殖へて來ると、今度は初等教育  
と云ふものが盛になつて來ると云ふのは、是はもう明白なる事實だろうと思ふ。次に高等教育を施すと云ふことは完全の  
女教師を殖やす、女子教育の一番缺けて居ることは、教員の良い者がないと云ふことで御座ります。又本當の高等教  
育を、女子に授けますと、賢母良妻が出來るに相違ありません。お轉婆でなくて、謙遜な淑女が出來るに相違ありま  
せぬ。そうして、段々、高等教育を受けた女子が女徳を備へ、淑女となり、賢母となり、良妻となりまして、社會に  
現るゝに至ります時には、一般の女流社會の智識德行を刺戟致しまして、從て社會を改善し、教育を普及發達せしむ  
るに相違ないです。若し正當な高等教育で、女學生の高慢とか、我儘とか、粗暴とか云ふものを除き去つて、淑女を養  
成する様になつた時は、世人が女子教育の功能を覺り、女子教育の必要を感じ、女子教育を是認するに至り、大に女  
子教育の盛大を來すに相違なひです。でありますから、實地に高等女子教育をやつて、眞正の女子教育の價値を世人  
に認識させるのが最も急務であります。米國に於ても大學教育が女子に及んで一般の教育と云ふものが進むて來た、  
普及して來たのでござります。一例を舉れば一郡に一人の娘が女子大學を卒業するとその一郡の女子教育が、發達普  
及致しました。

今日日本國民は、外國人が我國に入込んで我國の女子を辱はかきめると云ふて、大に憤慨して居る、けれども、是は實

に我國の女子が愚であるからでございませう、無學であるからでございませう。若しもう少し智識が進んだならば、さう云ふ馬鹿なことをしない。私は此日本の今の遺傳を改めるために、國民を強くするために高等教育を施して、高等の智識を女に與へることは——醫學生理の智識を吹込むことが必要であると云ふことを深く感じて居ります。それで我國の女子教育は、もう少し醫學上の智識を與へぬと大間違であらうと思ふ。此醫學に暗い處からして、種々の弊害を來すものが、随分多くござりませうと思ひます、各女學校に少し醫學の分つたところの教師を置いて、體操教育をするの必要を感じて居る、夫で女子に醫學と云ふ高等の智識を授けて、段々此醫學上の智識を以て、——夫に外の智識ももつと進むで参りましたならば、大に我國に今日ある處の不道德や、不養生は無くならうと思ふ。夫で英國や、或は米國の、是まで高等教育を授けてから以來二十年間の成績を以て調べて見ますと高等教育を授けたために一般女子の健康と道德を進めました。故に英米にをきましては、二十年前から見ると、今日は女に醫學の智識が進んで居る。従つて女學生の身體が大變に進歩して居る。學校に這入つた時より卒業して出る時は進むで居る、學校に這入らぬ者より學校の生徒の方が能なつて居る。決して女が高等教育を受ける様になつてから國民が小さく弱くなつたなどと云ふとは云はれない。私は是まで、亞米利加の例を多く引きましたから、諸君の中に或は私は亞米利加の女子に心酔して居ると云ふ疑があるかも知れませぬが、決して私は心酔しては居らない。私も亞米利加の女子の弊害を認めて居る、随分其弊害を感じて居るけれども、是は教育其ものゝ罪ではない、彼國風俗の罪である。私が亞米利加の教育制度を餘計引いたと云ふものは、亞米利加では二三十年間の實驗に照して行つて居る、其結果も此處に顯れて來て居る、故に其國民の云ふところのものには大變注意を傾ける價值があると考へて居りますし、又女子教育を擴張する材料として、随分必要と思つて居りますから、此處に引用した譯でございませう。

終りに臨むで、私の希望を結んで申せば、何うか我日本國民を少壯なる國民にしたい、若い國民にしたい、偉大なる

國民にしたいと云ふ希望でございます。此偉大なる國民にする少壯なる國民にするには、何うしても、女子教育を振起しなければならぬ、然るに今日の日本女子教育の現状でありますが、前に申した通り、萎靡ひびとして振はざる有様でありますから、之を振ひ起さぬければならぬ。即ち一つは上より下に及して此教育を振起すること、夫からもう一つは、下より上に及して振ひ起すことにしなければならぬ。而して之を成すには、第一に此教育家たる者が目を醒さねばならぬ、誰世間の攻撃や些々たる弊害に怖れて居つたならば、何時此教育——女子教育と云ふ者は振って参りませう。第二に其教育の方針が分らぬと云ふならば、益々教育家たる者は之を研究して、方針を確定してやらなければならぬ。第三に此教育家たる者が、啻に初等教育ばかりに目を着けて居つたならば、十分の事は出来ませぬから、初等教育に手を附けると同時に、高等教育に手を附けて、上下兩端から行って相助けるやうにしまして、一方には女子を益々進歩させ、一方には一般女子教育の上に刺戟を與へたりと云ふことを希望する譯でございます。併し今日私の述べましたのは、重に「プリンシプル」 Principle でござりまして細い方法に亘る時間かなかつたのは、誠に私の遺憾に存じますとござります。(拍手大喝采)

(明治三十年四月出版)

